

## 5. 岐阜大学 ACT-Plan における現場実習の効果に関する 一考察 (2)

— 2年「教職リサーチ」における学生の意識を中心に—

音楽教育専修 松永洋介

### 1 はじめに

岐阜大学では教員養成システムとして平成16年度入学生より ACT-Plan を実施している。ACT-Plan では、1年生から4年生まで毎学年、小中学校を対象とした教育現場に学生を派遣し、現場から学ぶことを目的としている。

「教職リサーチ」は ACT-Plan にもとづいて、教育学部2年生に必修科目として配置されたものである。したがってこの科目では、学生は1年次にすでに観察実習「教職トライアル」を履修していることを前提としている。

学生は1年次前期に「教職トライアル」を履修して教育現場の観察を行っている。しかし、このときは午前中の1、2校時の授業参観と、それに続く休み時間に児童・生徒と遊んで帰ってくるというきわめて短い時間の中で行われた。加えて小学校と中学校の観察が交互に続き、しかも同じクラスに配属されることはない。したがって同一クラスに5日間連続して現場に入り込んだ経験は初めてである。

筆者は『教師教育研究』第2号において、1年次実施の「教職トライアル」における学生の意識を報告した<sup>1</sup>。本論文では、1年後に「教職リサーチ」を履修した学生の意識を探ることによって、ACT-Plan 実施上の成果と課題を探ることを目的とする。

今回研究対象とした学生は音楽教育講座に所属する14名（男子2名、女子12名）である。「教職リサーチⅠ」および「教職リサーチⅡ」を履修した学生の毎日の実習ノート及び実習後に提出したレポートから、この実習についての学生の意識の変化を探り、いくつかの視点を設定して分析する。

### 2 「教職リサーチについて」

「教職トライアル」は1年次前期の授業15回中、4回を附属小学校、附属中学校への観察実習に充てるもので、観察実習の次の週は観察内容についての討論に充てられ、2週を1クルーとしている。

これに対して「教職リサーチ」は2年生の9月に集中講義扱いで行う。この授業はⅠ、Ⅱ、Ⅲの3つの科目からなり、「教職リサーチⅠ」は小学校、「教職リサーチⅡ」は中学校、「教職リ

1 松永洋介 (2006), 「岐阜大学 ACT-Plan における現場実習の効果に関する一考察 — 1年「教職トライアル」における学生の意識を中心に—」, 岐阜大学教育学部, 『教師教育研究』第2号, pp.69-75

サーチⅢ」は養護学校でそれぞれ1週間（5日間）実習を行う。各科目はそれぞれ独立し、1科目選択必修となっているため、ⅠとⅡの両方を履修する必要はないが、ほとんどの学生は二つとも履修する。また、「教職リサーチⅢ」は養学課程対象である。

実習校は、岐阜市内の公立小・中学校である。夏休み明けの時期であるが、5日間連続して教育現場に入ることによって、児童・生徒との関わり合いや、教師の仕事などについて見えてくるものが多いことが期待できるのが集中講義としての特質であるといえる。

### 3 学生の意識からみた「教職リサーチ」の成果

今回の実習を通して、学生は次の4点について意識を高めることができたと思う。

- (1) 児童・生徒の特性をより深く知ることができたこと。
- (2) 教師の仕事への理解が深まったこと。
- (3) 教員志望への意欲を高められたこと。
- (4) 自分の専攻を学習する意義を見出せたこと。

以下、項目ごとに考察していく。

- (1) 児童・生徒の特性をより深く知ることができたこと。

実習前、ほとんどの学生は不安を感じていた。それは、児童・生徒にどのように接すればよいかという不安である。例えば、ある学生は「実際に現場に入る前までは、子どもたちにどのように話しかけたらいいのだろうか、私を受け入れてくれるのだろうか、ととても不安でした」と述べている。この不安は小学校の場合、児童から話しかけられることで解消されたケースが多い。

しかし、中には、「(略)初日に教室へ入って後ろで立っていると、一人の子どもから『あんた何しに来たの。そんなところに突っ立って何しとるの』といわれ・・・(中略) 衝撃を受けました。言葉が冷たいとかそういった衝撃ではなく、自分の想像以上に子どもは大人を見ていると感じたからです」と述べている学生もいる。担当教師から児童に紹介され、無条件に「先生」と呼ばれると思っていたのに、休み時間に子どもと関わろうともせず、茫洋と教室の後ろに立っているときに「あんた何しに来たの」と呼ばれたことがこの学生の意識を変えることにつながったと考えられる。

一方、中学校実習の場合は、小学校以上に不安をもっていた学生が多い。「中学生」ということで、小学生よりも一歩大人に近づいている分、自分たちを受け入れてくれるのかという不安が強かったと思われる。そのことは、「中学生といえば思春期の難しい時期です。馴染めるのか不安に思いつつ一日目が始まりました」や、「小学生とのギャップにかなり悩まされました。あれだけ楽しく歌っていた子どもたちが5年後にはこうなってしまうのかと正直驚きました」という内容の記述が多かったことから窺える。やがて学生は教室の中で過ごす中で、中学生の場合はまだ小学生のように児童から話しかけてくれることはなく、自らが積極的に生徒に働きかけていかなければ何も答えてくれないことに気づき、どの学生も生徒と話をしようと思いがけるようになった。その結果、話しかければたいいの生徒は話をしたり、一緒に遊んだりするようになったと述べている。また、普段は醒めていると印象を持った男子生徒が、大縄大会のために女子と協力して新記録を出す様子を目の当たりにして、中学生の内面を理解する糸口を見つけた学生もいた。

さらに別の学生は次のように述べている。

「中学校というものはまったく怖いものではありませんでした。一日一日と日がたつにつれて生徒と接する機会が増え、だんだん行くことが楽しくなってきました。自分が中学生だったときのことを考え、なめられるのではと思ったことは、かするところか真逆（ママ）といえるほど、そんな態度で接してくれました。無視されることもなく、話せば話してくれ、考えること、人への気遣いを感じてくれているところ、この実習は中学生への大きな誤解を解き、自分も過ごしてきた『中学生』というものを、客観的に見るというとてもいい機会だったと思います」

ほんの数年前まで中学生であった学生自身でさえ、実習当初は中学生と接することに対するある種の恐れを持っていた。小学生に対しては、不安はあったにしても恐れではなかった。しかし実習を通して、中学生に対するマイナスイメージを払拭し、一人の生徒として見るができるようになっていったことは、実際に中学校の教室へ入り込み、何日か過ごす中でしか得られないものであろう。

教職リサーチでは、小学校で1週間実習をした翌週、中学校で実習を行う。このことは児童・生徒の発達を見る上で非常に有効であると考えられる。特に小学校低学年に配属された学生が中学校で実習した場合は、児童・生徒の発達の差を顕著に見ることができると考える。

## (2) 教師の仕事への理解が深まったこと

### ①学ぶものから指導するものへの視点の転換

「教職トライアル」のときにも言えることであるが、学生は各教室へ配属されると、机と椅子を与えられ、教師の授業を参観することになる。しかし、普段大学で授業を受けている彼らにとっては、最初の意識は児童・生徒と一緒に小・中学校の授業を受けてしまうことが多い。この時点ではまだ指導者の立場からではなく、学生として受身の立場になっているのである。そのことに気づいた学生は次のように述べている。

「朝から夕方まで小学校にいるのは8年ぶりのこと（中略）久しぶりに小学生になったような気分だった。これではいけない。小学生として学びにきたのではないのだから。そう思っているも授業でなるほどなあど学ぶ姿勢が出てしまう」

この学生は自分の視点を転換しなくてはならないことに気づいている。しかし、まだ学生の立場としては無意識的に大学で授業を受けているのと同じ姿勢になるのであろう。

しかし、5日間を過ぎて学生の意識は大きく変容していた。この学生は5日間を終えて次のように書いている。

「1週間小学校で過ごして、教師と子どもの関わりや子供同士の関わりを見たり、教師の仕事を実感して（ママ）、教師という仕事を理解することができたと思います。すべての面を見ることはできなかったと思うけれど、多くのことを実感したり体験でき、充実した実習になりました」

この学生は「教師という仕事を理解することができたと思います」と書いているが、実際にはまだ十分理解しているとはいえない。それは自身も「すべての面を見ることはできなかったと思うけれど」と述べていることからわかる。しかし、確実に教師の仕事の一部を見ることはできたのは5日間という連続した実習の成果であるといえよう。

## ②理論と実際の現場との結合

1日目、教室に入るまでは、ほとんど学生の関心は児童・生徒とのコミュニケーションをどのように取るようにすればよいかということに向いていた。しかし、丸一日教室で過ごす中で、学生は教師の仕事にも目を向けるようになっていった。

目を向けるようになった内容の中で最も多かったのは、教師の児童・生徒への関わり方である。例えばある学生は次のように述べている。

「授業中に子どもたちの落ち着きがなくなってくると、私は落ち着きのない子を叱るという行動を取ってしまうと思います。しかし、この場面でこそほめるということが効果的になってくるのだと学びました。先生方の授業では、『○○さんはとってもいい聞き方をしているね』と一人の名前を出し、それによって周りの子どもにも姿勢を正すように促していました。小学3年生は競争心やほめられたという気持ちが大きくてみんな競うように姿勢を正しており、とてもよい授業の進め方だと思いました」

ここで彼女は、小学校3年生という児童の発達段階に目を向けている。こうした傾向は心理学の授業で学ぶ内容である。しかし、実際にそのとおりであるということを確認できたことは、学生にとっては大きな収穫である。理論と実際とが結びつくからである。この学生以外にも、教師が児童・生徒を叱る場面を観察し、教師はなぜ叱ることが必要なのかについて考える機会を持った学生は多い。別の学生は次のように述べている。

「このリサーチ中に、先生方が子どもたちを叱る姿をよく見ることができました。そのどれもが本気で怒っている様子で、こちらも何か悪いことをしたかのように思えるほどでした。そんなに大声で言わなくても、とったりもしました。私は叱るということが苦手です（中略）先生方を見ていて、怒ることも大切なことなのかも思いました。そして叱った後は、またいつもどおりの笑顔で（中略）そして子どもたちと一緒に成長していこうとする姿勢でいることが大事なのだと思いました」

この学生は「叱る」と「怒る」ことの区別がまだついていない。しかし、善悪を区別して指導することの重要性や、教師もまた成長する存在であることに気づいていることは、この学生がこの実習を通して大きく成長した点であるといえよう。

一方、中学校実習の時には、小学校と違って担任教師がホームルームに関わる時間の少なさに学生は気づいた。しかし少ない時間を埋めるために、各教師が朝の会や体育大会などでできるだけ生徒と関わろうとしている姿を見ている。

また、別の学生は「先生と生徒の間を一定に保つこと、生徒にできることは生徒に任せること、しかし生徒とともに授業を進めていくことの大切さ（後略）」と述べ、生徒に考えさせる部分と教師が指導する部分との分け方に意識を持つようになった。また、ある学生は「今回のリサーチで、教師は自分の考えを『押し付ける』のではなく、『伝える』ことが大切なのだ改めて感じました。生徒一人ひとりの様子を把握し、その生徒の心にあった対応が必要だということがわかりました」と述べている。

以上述べてきたように、全員の学生が何らかの形で、教師と児童・生徒との関わり方、特に教師のスタンスについて実際の場面を通して学び取っていた。この時点では各教科の内容やその指導方法への関心についての記述は少なかった。これは学生の関心が、授業方法よりも、児童・生

徒の理解方法の方向に向いていたのではないかと考えられる。すなわち、まず目の前にいる児童・生徒に自分たちがどう関わっていけばよいのかという切迫した状況がそうさせたといえよう。

### (3) 教員志望への意欲を高められたこと。

小学校、中学校それぞれの実習を終えた学生は、終了後次のような感想を述べている。なお、カッコ内の小、中はそれぞれ小学校実習後、中学校実習後を指している。

「実習中、たくさんのことを勉強させていただきましたが、その中で担任の先生がノートの書いてくださった『パワーと笑顔は子どもたちとの架け橋』という言葉が強く印象に残りました。私は笑顔とパワーを目いっぱい子どもたちに向けて教育の現場に立ちたいと思いました (小)」

「子どもと関わることの難しさを痛感した一週間でしたが、それ以上に子どもと関わることの楽しさ、大切さを学べた一週間でした。実習生と現職の教師とでは責任の重さも大変さも全く違うと思いますが、この実習で得たもの、感じたものを教師になることへの意欲に代えて今後に繋げていきたいと思います (小)」

「『熱心に話せば伝わるんだ、子どもは絶対に返してくれるんだ』ということがよくわかり、小学校教師への夢が膨らみました (小)」

「この一週間で、子どもの可愛さ、子どもがもつ大きな力を見ることができ、また自分は本当に先生になれる力を持っているのかということを考えさせられた。この経験をもとに、自分にとって教職とは何かを考えていきたいし、今の自分に足りないものをたくさん身につけていきたいと思う (小)」

「私はこのリサーチを終えて『教師になりたい』という夢が強くなりました。実際の教育現場では、子どもと接するという仕事だけでなく、他の仕事の大変さを少しだけ知ることができました。また改めて教員採用試験の大変さを知りました。しかし、その大変な中にも魅力を感じると思いました。それは、子どもたちのことを話してくださった先生の顔がキラキラと輝いて見えたからです。また、実際に5日間、子どもたちと過ごして戸惑う場面もたくさんあったけれど、とても充実していたからです。(後略) (小)」

「小学校の先生は、体力的にハードであるし、子どもは自分の思うように動いてはくれないし、辛いし大変なことはたくさんあると思いました。しかし、子どもたちの成長を間近で見ることができ、子どもと喜びを分かち合うことができるのはとても幸せなことだと思います。また、教師一人ひとり人間なのでそれぞれ違い、子どもにとって自分の代わりはいない仕事なのでやりがいのある仕事だと思いました (小)」

「この実習を通して、多感な時期にある生徒と関わることの難しさを痛感するとともに、中学生の現状を知ることができました。今回得たものは、今後の学びに生かし、教師になるという夢の実現につなげていきたいです (中)」

「これからもっともっと学んで中学校にいらっしゃる先生方のような教師になれるよう、よりいっそう力を入れて頑張りたいと思います (中)」

「この中学校の実習で、教師という仕事について深く考えることができた。スポーツ祭のときは、生徒たちのこれまでにない協力する姿を見て感動して泣きそうになる場面が何回もあり、この生徒たちがいるから教師はさまざまな素晴らしい感動を体験することができるんだと改めて

気づくことができた。生徒に誠実に向き合い、互いに努力しあって高めあっていけば、生徒から大きな感動をもらうことができるという、教師としての素晴らしさを知ることができて本当に良かった（中）]

これらの記述から窺えることは、教師の仕事の大変さを感じつつも、なおいっそう教師になりたいという気持ちを高めていることである。もちろん実際の教育現場は、学生が一週間の観察で見たようなものだけにとどまらず、もっとさまざまな大変さが付きまとう。そうしたことは昨今のマスコミ報道でも感じていると思われるが、そうしたこともわかった上で教職を選択しようとしていることは、教職の魅力が教職の大変さを上回るということはこの実習を通して感じ取ったからではないかと推察する。

その反面、教職に対する自分の志望動機を見直そうとする学生もいる。

「先生は本当に体力勝負である（中略）朝から晩までたちっぱなしはもちろん、声を張り上げなくてはいけない場面も多々あり、さらに子どもの様子に目を見張らなくてはならないため、気力も使う。子どもが下校した後も、授業の準備や計画のために仕事をしなくてはならないし、考え出したらきりがなくらいの仕事があるんだと思う。それを毎日毎日続けるためには、相当の体力・気力があるはずだ。さらに先生にも自分の家庭があり、家に帰れば自分の家庭のために働かなくてはならない。担任の先生はもちろん、小学校は女性の先生が多く、仕事と家庭を両立されている姿に心から尊敬した、この仕事をこなす自信がないと、とても先生は勤まらないだろうなあと感じ、私自身は務まるのか、ということをしっかり考えていかなくてはならないと思った」

教師の仕事としての素晴らしさを感じつつも、実際に仕事をしていく上での大変さをも推測している。このように教職についての大変さの部分については、学生に知らせておく必要があると考える。憧れを持って仕事に就くことは大切であるが、その仕事についてのマイナス面を知らされないまま就職することは、職業の定着という点で十分ではない面がある。しかし、先述したように、マイナス面を上回るプラス面を知らせることは、教員志望の学生を増やす上で必要なことであり、今後のガイダンスのプログラム編成にも生かしていく必要がある。

なお、全員の記述をここに引用したわけではないが、教師になりたいという記述は小学校実習後のレポートの方が多かった。これは、小学校教員を目指す学生が多いことによるものと考えている。

#### （４）自分の専攻を学習する意義を見出せたこと。

「教職トライアル」、「教職リサーチ」共に、児童・生徒のありのままを理解することが目的であり、指導法に関しては来年度の「教職プラクティス（教育実習）」が中心になるため、音楽専攻の学生ではあっても、音楽の授業を見るのが重点になるのではない。児童・生徒とともに学級単位で行動する。しかし、音楽専攻という立場上、音楽の授業への関心は高い。中には、ピアノを弾いたり、範唱・範奏を示したりする機会を設ける指導教員もいる。そうした機会を得た学生は、音楽の時間に他の実習生と二人でアカペラ二重唱をし、児童に「すごい」と言われた。この学生はその後次のように述べている。

「自分は音楽という技を生かすことで、子どもから尊敬され、注目を集めることができるのだと実感しました」と述べている。

また、別の学生は次のように述べている。

「私の専門教科である音楽についてもいろいろ考えさせられることがありました。(中略)音楽の授業では、中学校音楽の現状を見た気がします。もちろん男子と女子というだけでも、音楽に対する考え方の違いがあるように思いました。そのようなときに、どうしたら音楽に興味を持ってもらえるかということを考えていくことが、私たち教師を目指していく立場として重要なことだと思いました」

「中学校では専門教科を教えるということも大切になってくると思うので、技術の向上も努力しないといけないと思いました」

これまでの教員養成大学では、専門教科と教育との関連付けが十分とはいえなかった。これに対しては教科専門科目と教職専門科目との関連を図っていくことも一つの解決策である<sup>2</sup>。「教職リサーチ」は教職専門科目であるが、実習としての性格を持つところが、他の教職科目と違う点である。教職専門科目と内容では関連していないが、教員養成大学における教科専門科目の意義を2年生の段階で考えさせることができたことは、教育現場に入ることの成果であるといえる。

#### 4 「教職トライアル」から「教職リサーチへ」

前項では、「教職リサーチ」による学生の意識の変容を分析した。そこで本項では、昨年の「教職トライアル」が、今年の「教職リサーチ」にどのように連続しているのかについての考察を試みたい。

まず、昨年「教職トライアル」との違いについて二人の学生はそれぞれ次のように述べている。

「この一週間は本当に有意義な一週間だった。今の子ども様子を丸一日直に感じ取ることができるし、教職トライアルとは違って一週間教室で活動でき、子どもと親しみをもつ段階までいくことができた。」

「一年の教職トライアルでは授業を参観したり、子どもと遊んだりすることが目的で、学校生活のごく一部しか観察できなかったのに比べ、今回は一週間、朝から児童が下校するまで、連続して現場を見ることができ、様々な現場に立ち会えたことがとてもうれしく、また教員を目指す自分にとって非常に貴重な経験ができました」

彼らのように、連続して5日間教室の中に入って観察できたことがよかったと述べている学生は多い。それは朝から夕方まで、そして5日間連続することによって、児童・生徒の様々な姿を見ることができ、先入観から抜け出して事実を見ていこうとする姿勢ができつつあるからだといえる。

そうした姿勢を作り出すには、学生が毎日観察した事実やそれに対する感想を書く実習ノートが存在も大きい。児童・生徒の下校後、あるいは帰宅後、実習ノートを書くことによって一日を振り返る思考が促される。すなわち書くことによって、考察が加わるようになるのである。さらに翌日担当教師に提出することによって、書いたことへの返事がなされる。わずか5日間であるが、こうした積み重ねが学生の教職に対する思考を促したと考えられる。

「教職トライアル」では、授業観察後、観察したことを記入し、それをもとにした討論を翌週

---

2 例えば鳴門教育大学は教科専門科目と関連させた「教科内容学」にもとづくカリキュラム構想を発表している。鳴門教育大学コア・カリ開発研究編(2006),『教育実践学を中核とする教員養成コア・カリキュラム』, 暁教育図書

行う。また、討論のうち1回は附属学校とのテレビ会議で、直接話し合う。こうした経験の上に立って、「教職トライアル」を行ったことが学生の意識の向上につながるということは、ここでは確定できない。

ただ、ほとんどの学生の意識はこの「教職リサーチ」を来年の教育実習の前段階としてとらえている。すなわち、1年生で行う「教職トライアル」や2年生の「教職リサーチ」は3年生の準備であるという意識なのである。その意味では「教職トライアル」と「教職リサーチ」の本来の目的を再度学生に周知させ、これらの科目で学ぶことと大学の授業との関係、そしてそれらがまた次の実習に生きるという体系化した位置づけを明確にしておく必要がある。

## 5 おわりに

昨今のマスコミの報道によって、とかく教師の仕事に関してマイナスイメージを持たせるような特集が多い。そうした中、実際に学校現場へいき、児童・生徒の姿や、彼らの成長のために努力している教師の姿を学生が目あたりにすることができたことは、教師を目指す学生にとっては、教職に対する理解がいつそう深くなったといえる。

しかし、そのような学生の意識を大学での授業を結びつけ、来年の「教職プラクティス（教育実習）」へつなげていくシステムの構築についてはまだ十分とはいえない。これは今後の学部としての急務である。

また、教育学部に入学してくる学生のすべてが、教職を目指しているわけではない。特に音楽科の場合、教師ではなく、演奏家やレスナーなど音楽と関わる仕事ができればよいと考える学生もいる。一方、その反対に、教職を目指して入学しながら、この実習を通して教職を目指すことに戸惑いを感じる学生がいることも考えられる。今年の学生に関しては現在のところ皆無であるが、そのような学生に対するサポート体制を整えておく必要もあろう。

さらに、今回の実習で学生が得た、一人ひとりの課題意識を大学側がどう把握し、サポートしていくか、また来年9月の教育実習までに、大学での授業をどう構築するのかというカリキュラム上の問題が課題として浮かび上がってくる。

なお、今回の考察については、サンプル数が少ない上に、全員が同じ専攻であるというきわめて限定された状況の中で行ったものである。したがって、この結果をもって教育学部の学生全員の傾向と結論付けることはできないことを付記しておきたい。